

資質・能力の育成を図る 生活科・総合的な学習の時間の授業づくりに関する研究Ⅱ

藤上 真弓^{*1}・大塚 進真^{*2}・志賀 直美^{*3}・小林 弘典^{*3}
浦田 敏明^{*4}・前田 昌平^{*1}・岡崎 智利^{*1}

A Study on Living Environment Studies and the Period for Integrated Studies Lessons
for Fostering Qualities and Abilities II

FUJIKAMI Mayumi^{*1}, Otsuka Yukimasa^{*2}, SHIGA Naomi^{*3}, KOBAYASHI Hironori^{*3},
URATA Toshiaki^{*4}, MAEDA Syohei^{*1}, OKAZAKI Chitoshi^{*1}
(Received August 3, 2020)

キーワード：資質・能力、小学校教員養成、学部と附属の共同

はじめに

文部省（1993）は、「支援による教育」と題して、「何を教えるかというより、何を育てるか。何をさせるかというより、何をしたいと思ひ、願っているか。何ができたかというより、何をしようとしたか。これまではどうだったかというより、これからどうなるか。生活科は子供の側に立ち、一人一人の子供のよさや可能性をのばす教科です。」（前書き）と、生活科の授業づくりのあり方について説明している。このように、これまでの教育観を大きく変える教育原理のもとに生活科は平成初期に誕生し、創設当初は、「支援による教育」に挙げられているような授業の具現化を目指し、多くの生活科の授業研究や研修会等が実施された。しかし、時代の流れとともに実践研究が停滞し、「生活科の授業研究を参観したことがない」「どのように授業を進めていったらよいか分からない」という悩みを若手だけでなく中堅教員からも聞くことが多い。

生活科は、具体的な活動や体験を通すことによって、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目指している。しかし、活動や体験を通すことを前提条件にしているがゆえに、「どういった活動や体験を設定するのか」ということに力が注がれてしまい、活動や体験をこなしていくというような実践も見られがちである。どういう目的でその活動や体験を設定するのかということを明らかにしなくては、教科としての目標を達成することはできない。それとともに、その活動や体験の中で、教員はどういった立ち位置でどのように子どもの活動や体験に関与していったらよいかということ吟味しなくては、生活科が目指す授業に近づくことは難しい。

生活科のこの授業づくりの本質を具体的な手立てにつなぐには、実際の授業における手立てやそれによって生まれる子どもの姿を参観して学ぶことが一番の近道であるが、その機会も減っている。その上、小学校低学年の2年間だけにある教科であるため、学びたいと考えても実際に授業を行うにはその学年の担任にならなくてはいけないため、授業力を磨く機会を得ることも難しい状況である。

このような状況を踏まえ、生活科の取組を充実・発展させていくために、生活科の授業づくりに関する理論的背景や、それを実現する具体的な手立て等について把握できるような研修をどのように行っていくべきか、検討する必要性を感じた。そのためにも、教職志望学生や若手教員が、生活科の授業づくりに対して、どのようなことに悩みを抱えたり、興味・関心をもったりしているのかについて把握しながら、教員養成に携わっている大学が研修の場を提供する必要があるのではないかと考えた。

*1 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻 *2 山口大学教育学部附属光小学校
*3 山口大学教育学部附属山口小学校 *4 山口大学教職センター

1. 研究の目的と方法

1-1 研究の目的

本研究は、学生や若手現職教員対象の研修会を実施することで、生活科の取組を充実・発展させるための研修の在り方について見つめ直すことを目的とする。

1-2 研究の方法

本研究では、授業づくりに関する理論と実践につなぐことができるような「生活科授業づくりセミナー」を実施する。セミナーは土曜日開催（2020年2月15日実施）とし、生活科の時間の授業づくりに悩みを抱えたり、興味・関心をもったりしている教職志望学生と現職教員が、自主的に参加できるようにした。ワークショップの講師は、山口県教育委員会から委嘱される生活科の教育力向上指導員としても働いていた経験があり、附属小学校にも勤務経験がある教員が行い、以下の流れで進めた。附属学校教員は、スタッフ兼参加者として、経験豊富なベテラン研修会講師からワークショップ型の研修のつくり方も学んでいくことができるようにした。

- ①参加者は、研修会の始めに、生活科の授業づくりで不安に思っていること、よく分からないと思っ
ていること、日頃の授業づくりで悩んでいること等について記述する。
- ②参加者は、2時間のワークショップ型の研修を受講する
- ③参加者は、研修会終了後に、「本日のセミナーで解決したこと、納得したこと、分かったこと等」
「もっとこういうことを学びたい。もっと知りたい。まだまだここが不安」等を記述する。

参加者の研修会前と後の生活科の授業づくりに対する意識やとらえ等の変容について把握し、研修内容や方法の効果や今後実施していくべき研修内容について分析・考察する。

2. 研究の実際

2-1 研修会の参加者について

ワークショップ型の研修で、実際に活動しながらの研修会を企画するため、大人数の参加では目的を達成できないと考え、参加者は40人以内ということとした。研修会の現職教員への案内は、若手小学校教員に限定し、主に山口大学教育学部小学校教育コース小学校総合選修の卒業生である教職1年目の小学校教員、教職2年目の小学校教員、2020年度に中国地区小学校生活科・総合的な学習の時間教育研究大会の生活科・総合的な学習中国・四国大会を控えている地域の若手教員や会場校の教員に対して行った。

研修会の参加者の内訳は、学部生（小学校教員志望）14人、教職大学院生（小学校教員志望・栄養教諭志望）5人、現職教員13人、大学教員4人、講師1人の37人であった。現象教員のうち、11人は山口県の小学校教員、1人は北九州市の小学校教員、1人は長崎県の小学校教員であった。現職教員の現在の担任は、第1学年は1人、第2学年は3人、第3学年4人、第4学年3人、第5学年2人であった。県外からの参加者は、山口大学の卒業生で新規採用教員である。県内からの参加者も、主に山口大学卒業生であるが、他大学出身者は中国地区小学校生活科・総合的な学習の時間教育研究大会の生活科・総合的な学習中国・四国大会を控えている地域の教員であった。

2-2 受講前の参加者の生活科に対する意識やとらえ等

図1は学部生（14人）、図2は教職大学院生（4人：実際は5人の参加であるが1人振り返りカードの提出がなかったため）、図3は現職教員（13人）が、生活科の授業づくりに対して、不安に感じていること・よく分からないと思っ
ていること・難しいと感じていること等を整理したものである。

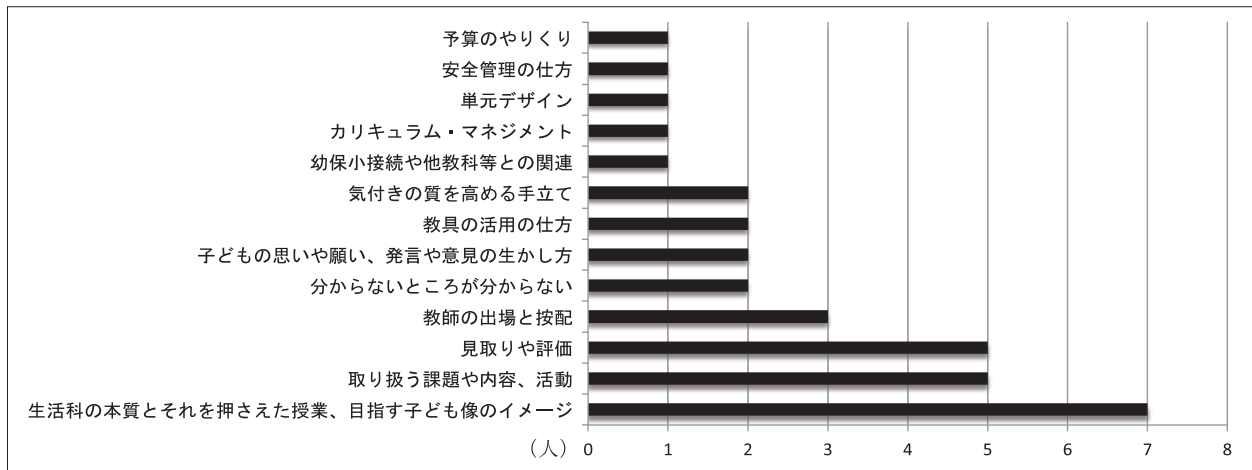


図1 「学部生」の受講前の不安・悩み・難しいと感じているところ (n=14)

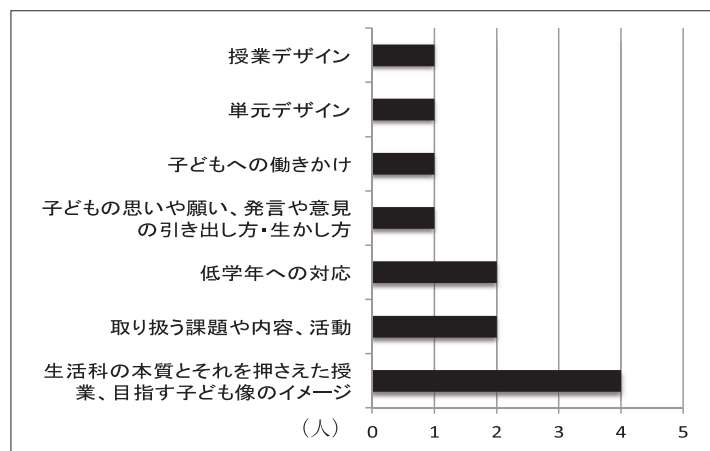


図2 「教職大学院生」の受講前の不安・悩み・難しいと感じているところ (n=4)

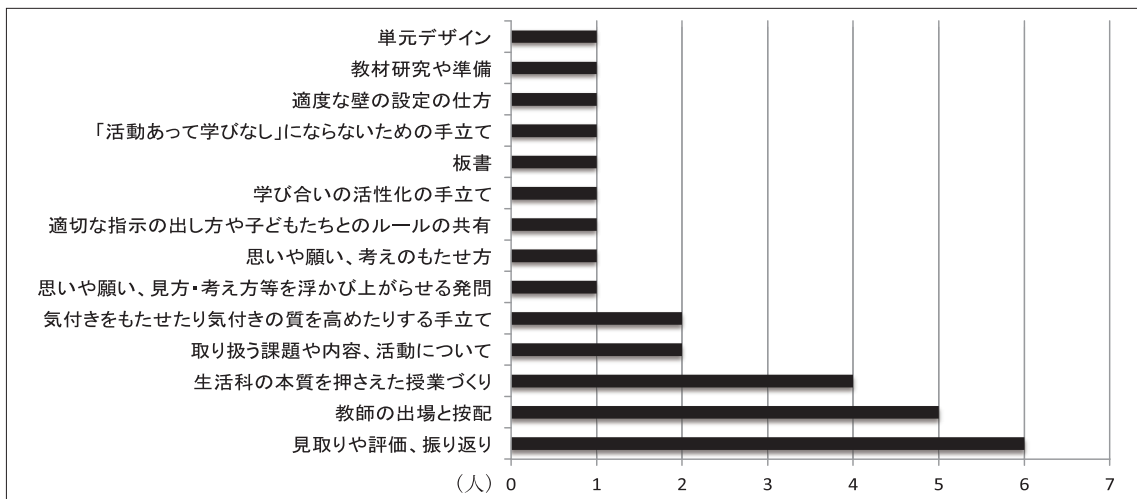


図3 「現職教員」の受講前の不安・悩み・難しいと感じているところ (n=13)

図1～3を見ると、受講前は、教職志望学生である学部生と教職大学院生の18人中11人（約61.1%）は、「生活科の本質とそれを押さえた授業、目指す子ども像のイメージ」が分からず、不安に感じていることが分かる。生活科に関わる講義（教科教育法生活・初等科生活）は必修であり、その中で、教科の本質や目指す子どもの像、具体的な手立て等について学んできている。しかし、小学校低学年期にしかない教科のため、教育実習においても低学年に配属されなければ、自身で授業を行うこともできない。低学年に配属されたとしても、授業時間が多く子どもたちが毎日学ぶ国語科や算数科等を優先して教育実習生の授業を組むため、

経験することができない場合が多い。そして、附属学校の研究会や公立学校の学校支援ボランティアで学校に入っても、生活科の授業を見る機会が少ない。そのため、イメージが湧かないという不安を抱えているのであると考える。「分からないところが分からない」（2人、約11.1%）という学部生もいる。

現職教員は、教職1年目～5年目までの教員が主であり、まだ低学年を担当したことがないという教員もいる。生活科の授業づくりを経験している・したことがある教員は、「見取りや評価、振り返り」（13人中6人、約46.2%）に悩みを抱えていた。「『思考・表現』と『気付き』の違いを知りたい」というように、子どもたちの姿からどのような資質・能力が発揮されているのかを適切に見取り、価値付け、評価しようとする真摯な態度が伺われる記述もある。また、「うまく『失敗』させること」といった、子どもにとって乗り越えられそうな適度な壁を設定し、試行錯誤をさせていくための手立てや、「考えをもつことが難しい子どもへの支援」を知りたいといった、子どもと向き合う中で抱えた悩みをもとにしているものが多かった。

2-3 生活科の授業づくりワークショップ（2時間）の実際

表1は、生活科のワークショップで取り扱った内容である。生活科のワークショップは2時間設定で行い、「身の回りのもので遊んでみよう」のように、十分時間をとって、対象の特徴をとらえたり、それを生かして遊びを考えたりする等、子どもの視点からも対象や活動について考える時間も確保した。そして、受講生が創った遊びやもの等を講師が価値付けたり、次の方向性を見いだすことができる声かけを行ったりすることで、子どもの学びの質を高める手立てやそれらの有効性を具体的に実感できるようにしていった。

表1 ワークショップで取り扱った内容

<p>1. 教師に求められるもの</p> <p>①生活科の特徴をとらえる</p> <p>②具体的に構想する</p> <p>○ゴール（単元の目標を達成した子どもの姿）を明確に決める 「『みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする』子どもとは、具体的にどんなことをしているでしょうか。」</p> <p>○学習活動と学習内容を決めて、学習計画を立てる 「この学習活動で、子どもがつかむことができる学習内容は何かでしょうか。」 ・初めて対象を触れ合っている時 ・友達と遊び合っている時</p>
<p>2. 身の回りのもので遊んでみよう</p> <p>「紙コップや紙の芯で遊んでみましょう。どんな遊びができるでしょうか。」 「どんな遊び方を思いついたか、伝え合ってみましょう。」</p>
<p>3. 豊かな学びにするには</p> <p>①学びを豊かにする学習活動 ②豊かな学びにするために ③子どもとの会話で使いたい言葉 ④生活科の評価の観点</p>
<p>4. 振り返り</p>

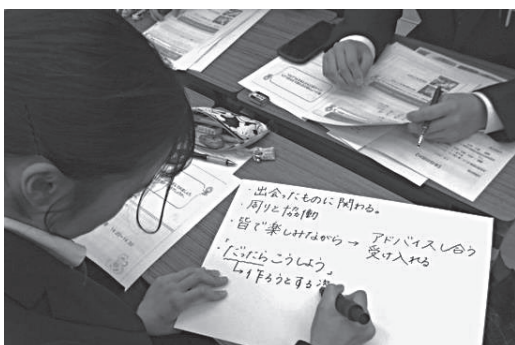


図4 「『みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする』子どもの姿」について、4人組で話し合う様子



図5 考えた紙コップや紙の芯でできる遊びの一部



2-4 受講後の参加者の生活科に対する意識やとらえ等

2-4-1 生活科のワークショップ受講後に解決したこと、納得したこと、分かったこと等

表2は学部生、表3は教職大学院院生、表4は現職教員が、生活科のワークショップ後に解決したこと、納得したこと、分かったこと等の具体を整理したものである。図6は学部生、図7は教職大学院院生、図8は現職教員の納得したこと、分かったこと等の内容（分類）とその内容を記述した人数である。

表2 「学部生」が解決したこと、納得したこと、分かったこと等の具体 (n=14)

分類	コメント（記述）
教師の子どもへの声かけ・働きかけ方	<ul style="list-style-type: none"> ・活動している時の声かけ。 ・子どもの気付きを引き出す言葉かけ。 ・体験をさせることで、子どもの声のかけ方、つなぎ方が大切だと分かった。 ・子どもが活動をしている時に、教師がどんな働きかけや声かけをするとよいのかを実際に見ることでコツが分かった。
生活科の本質	<ul style="list-style-type: none"> ・生活科ではどのような視点で子どもたちを育てているのか。 ・生活科の本質を体験しながら学ぶことができ、楽しかったし、とても勉強になった。 ・今日自分が体験を通して感じたことを忘れず、子どもの視点になって考えることの大切さを感じた。 ・豊かな学びがいったい何であるのか（体を使う、試行錯誤、言葉）
「活動あって学びなし」にならないための教師の手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・活動あって学びなしにならないための教師の手立て。 ・ゴールを明確にすることで、遊びや活動だけで終わらないようになる。 ・気付きを自覚させることで、遊びや活動だけで終わらないようになる。
生活科で求める子どもの具体的な姿	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が遊びを体験することで、遊びを創ること、工夫することについて理解を深めることができた。 ・実際に体験しながら学べ、子どもたちとこのように関わりながら気付きを深めていくのだ、子どもたちはこうやって遊びながらよりよくするために考えていくのだと、具体的に知ることができた。
単元デザインのポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・教員として目的・ゴールを明確にして、授業を行っていききたい
見取りと評価	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ場面を他の人から見てもらって、人はそう見取れるということを知ること大事だなと思った。
教師の出場と按配	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもから引き出すという意識が大切だということに、納得。私が手立てしようとしすぎて、子どもの学びを奪ってしまいそうだなと思った。こちらでやってあげないと！という重いがあるのだろうなと思った。人の授業を見たり、自分で実践したりしながら、これからも考えたい。

表3 「教職大学院院生」が解決したこと、納得したこと、分かったこと等の具体 (n=4)

分類	コメント（記述）
生活科の本質	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに具体的な体験をさせること。 ・生活科は実は奥が深いということ、簡単にはいけないことがよく分かった。 ・生活科とは何かを知ることができた。
体験を通じた教材研究	<ul style="list-style-type: none"> ・自身が久々にものづくりを行って、子どもの感覚を思い出した。 ・生活科はとてもワクワクして楽しいものだと実感した。
子どもへの声かけ・働きかけ方	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもとのやりとりや指名の仕方も勉強になった。
生活科で提供される豊かな学び	<ul style="list-style-type: none"> ・学習活動（何をするか）ではなく、学習内容（何を学ぶか）を意識していきたい。生活科で「学びを豊かにするためには、からだ全体を使う体験を大切にす」という中で、視・聴・嗅・触覚に付け加えて味覚も可能にできるのが給食等であり、食の大切さについてつなげることができる部分だと思った。
見取りと評価	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの思考を見取ることの大切さに気付いた。

表4 「現職教員」が解決したこと、納得したこと、分かったこと等の具体 (n=13)

分類	コメント(記述)
生活科の本質を押さえた授業づくり、目指す子ども像	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴールを明確にする(どんな子どもの姿にするのか)。 ・子どもたちが「こうなってほしい」という姿になるために、私たちが手立てを考えるのは他の教科と同じだけど、それまでの過程が他教科と少し違うと思った。活動の途中で会話の中から考えを引き出して、もう一度試行できるようにすることや、いい考えを広げていくことが大切だと分かった。 ・生活は授業をこうしなければならないという正解があるのではないことを学んだ。
思いや願い、考えのもたせ方	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ全てを用意せず、「うまくいかない」ことから、「これがあれば」「もっとこうすれば」という思考を導き出す。 ・子どもが自由に活動できる場所や十分な時間を確保することが大事なこと。 ・子どもの主体性を大切にすること、言葉かけ、場づくりが大切であると思った。
言葉掛け	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの主体性を大切にすること、言葉かけ、場づくりが大切であると思った。 ・おもちゃ作りを通して、教師の言葉かけや子ども同士の関わらせ方について、考えることができた。 ・言葉かけの仕方や全体共有の仕方を学ぶことができた。
教師の出場と按配	<ul style="list-style-type: none"> ・教師はサポート。 ・子どもたちが「こうなってほしい」という姿になるために、私たちが手立てを考えるのは他の教科と同じだけど、それまでの過程が他教科と少し違うと思った。活動の途中で会話の中から考えを引き出して、もう一度試行できるようにすることや、よい考えを広げていくことが大切だと分かった。 ・子どもの思いに添ったものにするためには、子どもの思いを引き出す姿勢や手立てについて学んだり、一緒にやってみたりすることが大切であると感じた。
見取りや評価、振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの発言を見取るためにも、子どもたちと一緒に学習するということが大事だと改めて思った。 ・振り返りについても、文字に残すことも大切だが、発達段階に合わせて、絵等から教師が見取ることも大切であると学んだ。
学び合いの深化・活性化の手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃ作りを通して、教師の言葉かけや子ども同士の関わらせ方について、考えることができた。 ・言葉かけの仕方や全体共有の仕方を学ぶことができた。
気付きをもたせたり気付きの質を高めたりする手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・気付きを自覚化。
適度な壁の設定の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ全てを用意せず、「うまくいかない」から、「これがあれば」「もっとこうすれば」という思考を導き出す。

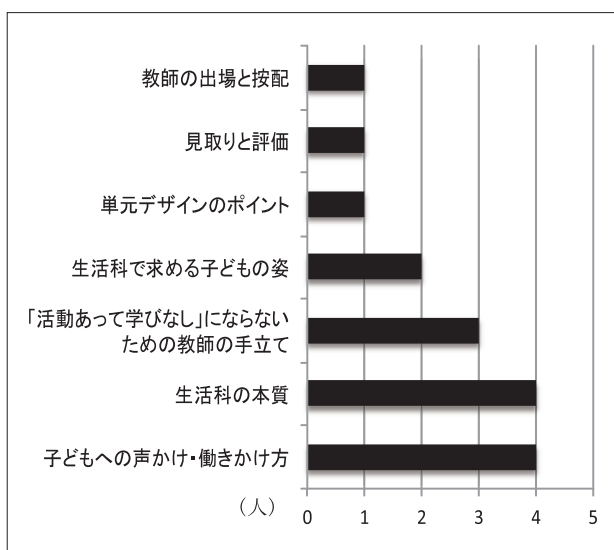


図6 「学部生」の受講後

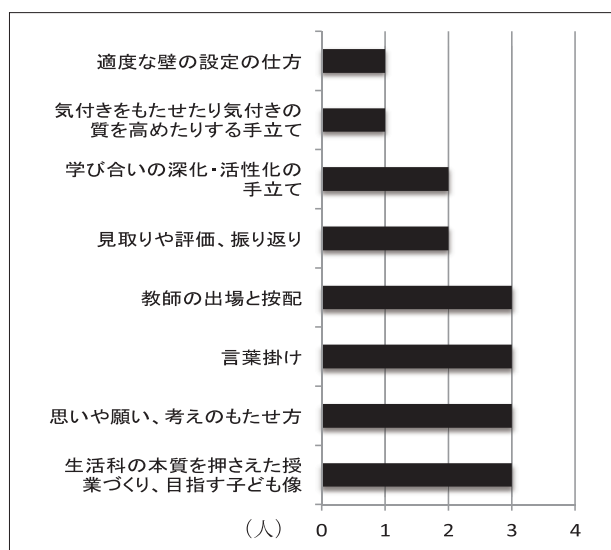


図7 「現職教員」の受講後

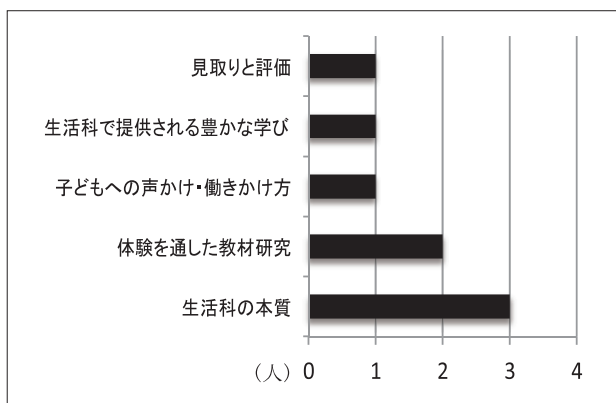


図8 教職大学院院生の受講後（生活科）

図6～8を見ると、現職教員と教職大学院生が、生活科の本質についてとらえ直していることが分かる。現職教員は、実践しているからこそ、理論に関わる内容に対して、自分が関わっている子どもの姿とつなげながら理解を深めることができたのではないかと考える。また、教職大学院院生は、「体験を通した教材研究」の効果についても実感しているのは、理論と実践の往還を図る学修を日々行っているからでないかと考える。学部生も生活科の本質についてとらえ直しているが、実際に授業を行ったことがないためか、「子どもへの声かけ・働きかけ方」という具体的な手立てに関わる記述が一番多かった。

2-4-2 もっと学びたいこと、知りたいこと、まだ不安に感じること等

表5は、学部生と現職教員のこのセミナー後にもっと学びたいこと、もっと知りたいこと、まだ不安に感じることを立場別に整理したものである。教職大学院院生には、これに関する記述はなかった。

表5 「学部生」と「現職教員」

	学部生	現職教員
導入の仕組み方		・導入の仕組み方
子どもの思いや願いと単元のねらいとの整合性		・活動の途中で、子ども自身のやりたいことと課題への向かわせ方
プログラミング教育との関連		・生活にプログラミング教育を取り入れるとしたら、どんな方法があるのか。
カリキュラム・マネジメント	・年間計画（1年間の単元の流れ、実践例）について、もっと知りたい。	
多くの実践事例	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの授業実践（単元を通した）の様子を学びたい。まだまだ分からないことだらけだが、授業づくりの視点を与えていただいた。たくさん学べた。 ・学校現場での一連の実践事例→どういった状況の子どもたちが何を学ぼうとしているのか。そこにはどういった目的や願い、思いがあるのか。 ・実際に子どもを相手に教師がどのようにしているのかといった実践の様子を、もっと知りたい。 ・年間計画（1年間の単元の流れ、実践例）について、もっと知りたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の授業事例。 ・授業づくりのネタ等。
意欲をもたせる手立て	・実際に子どもに意欲をもたせることができるか不安。	
教材開発・教材研究	<ul style="list-style-type: none"> ・教材づくり、選択の仕方。 ・教具の準備。 	
他教科との関連	・他教科の学びを生活でどう生かせばよいか。	

2-4-3 研修内容や今後の自分のキャリア形成等に関する記述

表6は、学部生の研修内容や今後の自分のキャリア形成等に関する記述、表7は、現職教員の研修内容や今後の自分のキャリア形成等に関する記述である。教職大学院院生には、これに関する記述はなかった。

表6 研修内容や今後の自分のキャリア形成等に関すること（学部生のみ）

学び続けたい	<ul style="list-style-type: none"> ・今日は悩んで、なかなか話し合いに参加できず自分の未熟さを感じた。これからもっと全般的に学びたい。 ・たくさんのことを教えていただいた。学んでもそれを実践することはとても難しく、また実践する時に悩むのだろうと思う。だが、実践する時に少しでも自分の力で解決できるように学び続けたいと思う。 ・学びの時間の確保。
--------	--

表7 研修内容や今後の自分のキャリア形成等に関すること（現職教員のみ）

自分の悩みや失敗等をもとに語り合ったり、相談しあったりする場がほしい	<ul style="list-style-type: none"> ・1年やってみて、うまくいかないこと、悩んだことがたくさんあったので、共有し合ったり、相談したりしたい!!
経験年数に関係なくよりよい授業づくりについて考える機会	<ul style="list-style-type: none"> ・（ベテラン教員）若い先生方や学生の方々が、一緒に考えてくださり、たくさん勉強になった。

3. 成果と課題

実際に子どもの視点に立って、対象の特徴をとらえていく過程や、特徴を生かそうと試行錯誤しながら遊びを創り出していく過程を体験していく中で、単元の過程で子どもが得るであろう思いや願い、気付きを実感していくような教材研究を行う重要性を、受講生は感じていた。また、実際に子どもの視点に立っているからこそ、講師による気付きの質を高めていくための、具体的かつ適切な声掛けや設定の工夫や効果に対する理解が深まっていった。しかしながら、学校現場において、同僚と共に時間をかけて教材研究を行っていくことは難しい場合が多いため、今回行った研修のように、教材研究を含めた生活科の授業づくり研修の機会を校外で保障し続けていく必要性を改めて感じた。

「もっと学びたいこと、知りたいこと、まだ不安に感じること等」を見ると、学部生は、現職教員以上に、多くの実践事例にふれることを求めている。大学の講義内だけでは実践事例にふれる機会に限られるため、附属学校の研究大会や授業づくりのセミナー等が行われる際には、参加の促し方を検討していきたい。また、今回の研修会の内容は、体験の時間を確保し、理論を実践につなぐことに力点を置いたワークショップ型で構成したが、そういった内容に加えて優れた複数の実践事例発表も取り入れていく必要性を感じた。ただ、研修会の時間設定が長くなると、参加するにも負担を感じる場合やスケジュール調整も難しくなるため、半日（午後）設定が適度ではないかと考える。現職教員にもそれは言えることで、山口大学が会場になる場合、会場への移動時間も含めての検討が必要であると考える。

おわりに

今回の研修会は、生活科に興味・関心をもったり、授業実践に悩みを抱え、なんとか改善したいという思いをもったりしている人が自主的に参加したものである。このような若手人材が生活科の実践を充実・発展させていく人材へと成長していってくれることを願っているが、より多くの教職志望学生や教員が生活科の授業づくりの本質や楽しさをとらえていけるような研修会や取組等のあり方を模索していきたい。

付記

本稿は、共同研究として実施した研修会における協議やそこで用いた資料等に基づき藤上が文章化したものである。本稿全体の文責は藤上にある。

引用文献

- 井口康江：「学部・附属共同プロジェクト研修会資料」（2020.2.15）
 文部省：「小学校 生活 指導資料 新しい学力観に立つ生活科の学習指導の創造」，前書き，1993.